

目的 人生80年時代を迎え、ただ働くだけの時代から、積極的に余暇を楽しもうとする時代へと移り変わり始めて来た。このゆとり感覚は、日本人の価値観とライフ・スタイルに影響をおよぼし、個性の表現としての時間の過ごし方と物の消費を楽しむ時代が始まったといえる。これは衣生活にも大きく影響を及ぼし、T・P・Oに対する服種の増加、各々の衣服にふさわしいデザイン・色・柄・着やすさの追求、着装を自己表現の手段とする傾向がみられる。本研究では、衣服設計教育の一助とするために、職業を持った若い女性の生活意識や着装行動を調査し、余暇生活との関連を分析、考察した。

方法 近畿地区に在住する20才代のOL288名を対象として、1987年8～9月に配布留置法により調査を行った。主な調査項目は、生活条件、余暇意識、余暇行動、ファッション意識、衣生活態度、衣生活行動等である。分析は、単純集計、クロス集計、因子分析、クラスター分析によってOLの余暇に対する意識と被服行動の関連を検討した。

結果 ファッション意識と余暇生活(衣服を含む)の因子分析をおこなったところ、現在行っている運動、スポーツ着の耐用年数、休みを過ごす場所に関連がみられた。さらに、クラスター分析をおこない、類型化を試みたところ5グループがみとめられた。その中で、人の持たないものを身に付けたいという積極的なグループは、年収、セーターの許容額も多く、休みを過ごす場所は盛り場や、ショッピング、日帰りの行楽地であった。20才代のOLは、流行に敏感で年令にふさわしい特性を持ち、服装によって自己表現をしようとしているが、衣服行動の実際は、現実と願望の調整を行っているものであると思われる。